

1.あいさつにかえて

2.「こんごう会」「こんごう参り」について

①名前について

- ・「魂迎」「金剛」「魂供」(こんご)と書く。(得)
- ・「婚後参り」「金剛参り(金剛会)」「魂供会」「サキボン」などとも呼ぶ。(禅)

②行われる地域

- ・能登半島中部を中心に、遠い江戸時代から大切につとめられてきたお参り。(常)
- ・中能登地方でも七尾鹿島地区の仏事である。(得)
- ・能登地方と富山県氷見近辺で行われている御参りだそうです。(日)

③内容(6月末、7月に行われる)

- ・他家に嫁いだ親族が、忙しいお盆を前に実家に帰り、お寺や先祖の墓にお参りし、お寺で食事をし、お互いに仏様の願いやご恩を味わうという、この地方の風習。(禅)
- ・他家へ嫁いだ方々が、忙しいお盆を前に実家へ帰り、お寺や先祖のお墓にお参りし、お寺で食事をし、お互いに仏様の願いやご恩を味わい語り合う大切な行事だったそうで、私は、親が無くなった子の御参りと思っていました。【書き込み】私もそう思っていました。昨日は我が家も叔父・叔母が集い、一緒によもや話に華咲かせていました。(日)

石動山天平寺の末寺の真言宗の行事だったらしいのですが、蓮如上人(1415-1499)の布教活動により多くの真言宗の寺院が浄土真宗の道場や寺院に姿を変え、この真言宗から浄土真宗に変わった寺院で、伝統的行事として、寺院運営の経済的な重要な基盤として、今まで通り「こんごう会」を営み、この行事が仏法に出会う大切なお縁の一つとして定着し、他の真宗寺院でも営まれるようになったらしいです。現在の「こんごう会」に共通することは、各寺院で昼食(お斎)があり、その後、お勤めとお説教がある。(日)

- ・門徒が年に一度手継ぎ寺にお参りします。特に村の外に嫁いだ者で一年間の内に実家の親を亡くした(孫門徒と呼んでいる)もお参りします。公然と実家に帰えることが認められた日で、お参りの後には実家を訪ねて兄弟水入らずの時を過すのが慣例となっている。(得)
- ・お浄土に帰られた方が、お嫁やお婿に行った兄弟も誘い合って勢揃いして手次寺(一般にいう菩提寺)にお参りし、共々に親のご苦勞を思い、おとむらいをする尊い仏事です。(常)

④ねがい

- ・阿弥陀様と共に、念仏の教えに出会って空しく過ぎることのない人生を生きて欲しいと、私に願ってやまない仏様として亡き親と出会いなおして頂く仏事。親が、参ってくれよ、阿弥陀様に出あってくれよと願っておられるお参りです。(常)

- ・お盆を前に、門信徒がお寺に会し、食事をしたりお説教を聞き、お互いに生かされている命の不思議さや尊さ祖先へのご恩を味わわせていただき、謙虚な気持ちでお盆を迎えようとする行事(日)

参考:(禅)曹洞宗公式サイト曹洞禅ネット

(日) ブログ「能登のよさこい」

(得) 真宗大谷派得源寺(七尾市田鶴浜)ホームページ

(常) 真宗大谷派常福寺ブログ「2016年 こんごう参り」

※ブログとは日記のこと

・無記

お釈迦様が、これらの質問に対して沈黙したまま、何も答えなかったもの。仏教で「記」は「いずれかに決定する」という意味で、「無記」は、「どちらとも決めない」という意味。十無記、十四無記、十六無記などある。十無記を挙げると、

- | | |
|-----------------------------|-------------------------|
| a(1) 世界は、常住(世界は時間的に無限) | (この世は永遠か) |
| (2) 世界は、無常(世界は時間的に有限) | (この世は永遠でないか) |
| b(3) 世界は、有辺(世界は空間的に有限) | (この世は有限か) |
| (4) 世界は、無辺(世界は空間的に無限) | (この世は無限か) |
| c(5) 身体と靈魂とは、同一 | |
| (6) 身体と靈魂とは、別異 | |
| d(7) 真理達成者(如来)は、死後に生存する | (如来は死後存在しないか・如来終) |
| (8) 生存しない | (如来は死後存在するか・如来不終) |
| (9) 生存し、かつ生存しない | (如来は死後存在し、かつ存在しないのか) |
| (10) 生存するのでもなく、かつ生存しないのでもない | (如来は死後存在せず、かつしないのでもないか) |

『パウツダ』三枝充憲(さいぐさみつよし)/中村元(なかむらはじめ)講談社 引用

これらの「無記」は、世界の成り立ちについてと、靈魂の存在についての質問に対する態度であることがわかります。このことを何度も問われたようです。お釈迦さん在世の時代、いくら「縁起」や「無我」を説いても、靈魂をめぐる死後の問題への人々の強い関心はなかなかぬぐい難かったのでしょう。こういった答えの出ない問題、どちらと答えても際限ない議論に陥る問題に関わることは修行者の利益にならない、従って関わるべきでない、というのがお釈迦様の考えでした。

参考:インターネット<http://oshiete.goo.ne.jp/qa/246358.html>

・「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらずべし」

親鸞聖人は、29歳の時、比叡山の修行を続けてももうだめだと悩んで、京の都に、善き人にも悪しき人にも、男にも女にも、お年寄りにも若きものにも、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらずべし」と、念仏ひとつを勧める法然上人の噂を聞いて、聞きに行くんですね。その時に言われたのが、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらずべし」です。

それから比叡山に戻って、やっぱりずっと悩み続けて、聖徳太子が建てられた六角堂に百日と区切って、籠ることにした。なにか他にいいものがあったら比叡山を下りたのではないことは六角堂に籠られたことでわかります。それで、九十五日目に夢のお告げがあったんですけども、もしそれがなかったらどうされたのかな。どうされたと思いますか。多分もう百日いるしかないでしょう。生きることも死ぬことも出来ないですからね。

九十五日目のあか月、寅の時、午前四時頃に夢を見て、これはどうしても法然上人のところにもう一度行かねばならない、聞き直さねばいけないと、夜が明けのを待ちかねて、すぐに法然上人の所に行った。そこで法然上人に言われたのがまたしても同じ言葉です。「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらずべし」この時に、そうだなと、念仏すべき身であったとうなずかれた。

(仮)『信じるということ』佐野明弘著

3. 鈴木大拙の『日本的靈性』

鎌倉時代になって、人間は目覚めた。それを「日本的靈性」という。それをひらいたのは、親鸞と道元である。親鸞の場合は、他力と大悲心をうけることによって、靈性の扉が拓けた。

他力と大悲心 = **靈性の扉** が拓けた

平安期は幼くて、鎌倉期に自覚化した。平安期には『源氏物語』などがあるが、人間が精神性をもって何かを語る場合、「すき」「きれい」「ふられた」とか、あるいは「美しい」「もののあわれ」あわれにも時は移ろい過ぎ終わっていくという、なんとなく無限の世界からうけとっていたのが平安期であり、人間はまだ幼稚さを抜け出していなかった。

鎌倉期にはいって、完全に人間が目覚めた。人間がはじめて自覚的に生きるようになった。自分はだれて、何者であって、どこに向かって進んでいけばいいのか、ということにはじめて目覚めたのが親鸞と道元である。親鸞の場合「他力と大悲心」を「靈性の扉」という。この靈性の扉が拓けると、まず自己否定が起こる。

扉が拓けると →

・自己否定 ・深い反省

 によって日本的靈性がめざめた

平安期には、このような自覚はなく、人間が自己を否定するとか、自分自身や社会に対して深い否定や反省がないまま来たが、鎌倉期に親鸞や道元が明確に悲嘆というものは始める。「そらごとたわごと、まことあることなき」と人間が自覚化している。

4. 念仏のみぞまこと

まことに如来の御恩ということばをばさたなくして、われもひと、よしあしということばのみもうしあえり。聖人のおおせには、「善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり。そのゆえは、如来の御こころによしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」 『歎異抄』後序

意識：まことに、如来のご恩ということは思わずして、われもひと善いの悪いのということばかりを言い合っている。ところが聖人は、「自分には、なにが善いことであり、なにが悪いことなのかは、まったくわからない。そのわけは、如来のみ心において善であると思召しておいでになるほどに善を知りつくしているのならば、善とはなんであるかを知っていると見えよう。また如来のみ心が悪と思召されているほどに、悪を知り尽くしているのならば、悪とはなんであるかを知っていると見えようが、ありとあらゆる煩いと悩みをそなえた凡夫として、火のついた家にもたとえられるような無常の現実を生きる限り、すべてのことは、そらごとであって、たわごとであって、一つとして真実だと言い切れることなどはない。ただ念仏だけが真実です」 参考：『歎異抄講話4』広瀬泉 法蔵館

必ず^{けつじょう}決定して^{もち}眞実心の中に^{とくしょう}回向したまえる願を須いて得生の想を作せ。 『教行信証』信巻
(必ず決定して如来が眞実の心の中で回向したもう願をいただ(須)いて、往生を得たすがたを想いなさい。)
「解説教行信証」 東本願寺発行

しかるに称名憶念あれども、無明なお存して所願を満てざるはいかん 『教行信証』信巻

衆生の行は眞実ではない。「雑毒の善」で、「虚仮の行」。しかし、如来の行はずっと眞実である。阿弥陀仏が菩薩の行を行じたもうた時、わずか一念一刹那にいたるまで身口意(こころ)の三業によって修められたものはすべて眞実の心の中で作(な)されたものだからである。だから、如来の回向の信をいただいて、往生を得たすがたを想いなさい。

・眞実心の検索 「信巻」同じような言葉が4回(頁は『眞宗聖典』)

『経』に云わく、「一者至誠心」。「至」は眞なり。「誠」は実なり。一切衆生の身・口・意業の所修の解行、必ず眞実心の中に作したまえるを須いることを明かさんと欲う。外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐いて、貪瞋邪偽、奸詐百端にして、悪性侵め難し、事、蛇蝎に同じ。三業を起こすといえども、名づけて「雑毒の善」とす、また「虚仮の行」と名づく、「眞実の業」と名づけざるなり。もしかくのごとき安心・起行を作すは、たとい身心を苦励して、日夜十二時、急に走め急に作して頭燃を灸うがごとくするもの、すべて「雑毒の善」と名づく。この雑毒の行を回して、かの仏の浄土に求生せんと欲するは、これ必ず不可なり。何をもつてのゆえに、正しくかの阿弥陀仏、因中に菩薩の行を行じたまいし時、乃至一念一刹那も、三業の所修みなこれ眞実心の中に作したまいしに由つてなり、と。おおよそ施したまうところ趣求をなす、またみな眞実なり。また眞実に二種あり。一つには自利眞実、二つには利他眞実なり。乃至 不善の三業は、必ず眞実心の中に捨てたまえるを須いよ。またもし善の三業を起こさば、必ず眞実心の中に作したまいしを須いて、内外・明闇を簡はず、みな眞実を須いるがゆえに、「至誠心」と名づく。(215頁)

また回向発願して生ずる者は、必ず決定して眞実心の中に回向したまえる願を須いて得生の想を作せ。(218頁)

(散善義)光明寺の和尚云わく、この雑毒の行を回して、かの仏の浄土に求生せんと欲うは、これ必ず不可なり。何をもつてのゆえに、正しくかの阿弥陀仏因中に菩薩の行を行ぜし時、乃至一念一刹那も、三業の所修、みなこれ眞実心の中に作したまえるに由つてなり。おおよそ施したまうところ趣求をなす、またみな眞実なり。また眞実に二種あり。一つには自利眞実、二つには利他眞実なり、と。乃至 不善の三業をば、必ず眞実心の中に捨てたまえるを須いよ。また、もし善の三業を起こさば、必ず眞実心の中に作したまえるを須いて、内外・明闇を簡はず、みな眞実を須いるがゆえに、「至誠心」と名づく、と。(226頁)

(散善義)光明寺の和尚の云わく、また回向発願して生まるる者は、必ず決定眞実心の中に回向したまえる願を須いて、得生の想を作せ。(234頁)

親鸞聖人が生きられた時代

- ・親鸞聖人は1173(承安三)年、京都にお生まれになりました。
1262(弘長二)年11月28日、90年の生涯を終えられました。(東本願寺ホームページより)

・鎌倉時代に起きた大きな飢饉

寛喜の飢饉(1230～32)、正嘉の飢饉(1258～60)、元徳の飢饉(1330)

- ・鎌倉時代には寒冷化が進んだとされ、飢饉の際には餓死者の死体があちこちに放置されていた
- ・地震が毎年のように起こり1293年鎌倉大地震、津波発生(推定死者は2-3万人)1270-80年代をはじめとして阿蘇山が数度にわたって噴火。その他、早魃(かんばつ)・洪水・虫害・疫病などもたびたび起こった。

参考:稲田禅房西念寺ホームページ

「親鸞聖人が生きられた時代の日本は?」山田雄司(三重大学教授)より

- ・【寛喜の内省】『恵信尼消息』に書かれる

寛喜三(1231)年四月四日親鸞聖人は風邪を引いて高熱をだしてうなされる。看病を拒絶。そして、四月十一日(一週間後)に「ま(今)はさてあらん」とおっしゃった。「まはさてあらん」は、「これからはこうしよう」ということ。突然の言葉に驚いて「寝言ですか」というと、親鸞聖人は「寝言じゃない」。

夢の中で『無量寿経』を必死になって読経していた。目をつむるとお経の文字がきららかに見える。私は一体何をしているのか。念仏ひとつと信心決定しているにもかかわらず、一体何をしているのだろうかと思った時に、昔の体験、「佐貫の地での体験」を思い起こしていた。

かつて上野国(群馬県)佐貫の地で「衆生利益」のために『浄土三部経』を千回読経しようと決意した。四、五日経って、南無阿弥陀仏以外は不要である。これはやっぱり間違っていると思い返して、読経するのをやめて常陸(茨城県)に移住していった。

自分の中にいつまでも「自力の信」が残っていることに気づき、「ま(今)はさてあらん」(これからはやめよう)と言った。この後、病気が回復した。

- ・【佐貫の体験】

この年(1214年)雨が降らず干ばつの被害がでて、人々は雨を求めて一生懸命お祈りをしていた。鶴岡八幡宮や京都で雨乞いが行われた。日照りの被害に苦しむ民衆が、この地に訪れた親鸞聖人に、日照りの被害を食い止めるためお祈りをしてほしいと頼み、「衆生利益」「雨乞い」のために浄土三部経を読誦した。しかし、聖人はこれは間違っていると考えて、途中でやめ、常陸国に移った。

- ・【寛喜の飢饉】

寛喜の飢饉は日本全国が苦しんでいた。恐ろしい被害、冷害が日本全国を覆っていた。

聖人が熱を出した寛喜三(1231)年四月は、寛喜の飢饉のピークで、寛喜二年(1230)六月九日、美濃・信濃・武蔵に雪が降る。岐阜県・長野県から東京に至る内陸地帯一帯に六センチから一メートルの雪が積もった。六月九日は今の太陽暦になおせば七月下旬。

六月十七日、京都の貴族の日記に、夜寒く、綿入れを着て寝ないと風邪を引く。と書かれている。

七月十六日、諸国に霜が降る。「殆如冬天」ほとんど冬天の如し。(太陽暦では八月下旬)

七月の下旬には雪が積もり、八月の下旬には全国に霜が降りた。

八月八日、大風雨、台風。ほとんど穀物は壊滅状態。北陸の田んぼの稲が立ったまま枯れている。九州も同様。

十月十三日、藤原定家「凶年之飢」のため、庭を麦畑に。この頃、京都の貴族の女中頭が飢え死。十一月二十一日、一転して暖かくなり、桜が咲きタケノコ、麦が芽を出す。十二月十八日セミが鳴く。二十三日雪が降る。恐ろしい天候不順。

翌年の二月、京都で疫病が蔓延。あるいは、鎌倉の百姓の餓死者膨大、鎌倉幕府が米を放出。
四月六日、京都でも「餓死死人、充満道路」餓死の死人が、道路に充満した。

平雅行(日本史学者。中世仏教史専門。大阪大学名誉教授)

「ま(今)はさてあらん」真宗大谷派金沢教区教化委員会発行参考

歎異抄第四条

一 慈悲に聖道・浄土のかわりめあり。聖道の慈悲というは、ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもうがごとくたすけとぐること、きわめてありがたし。浄土の慈悲というは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもって、おもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり。今生に、いかに、いとおし不便とおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏もうすのみぞ、すえとおりにたる大慈悲心にてそうろうべきと云々

聖道門の慈悲というのはいってみれば自力の慈悲で、困っている人がいたならばできるだけたすけてあげようというのが自力の慈悲、聖道門の慈悲です。ただ、たすけてあげたいと思うのはやまやまなんだけども、そう簡単に思いどおりにたすけることができない。これが残念ながら私達の現実である。それに対して、浄土門の慈悲というの、直接たすけるわけではない。自分が南無阿弥陀仏を称えて極楽に行って、そこでさとりをひらいて、成仏をする。成仏をすれば、仏のパワーが手に入る。この仏のパワーでもってもう一度我々の世界に戻ってきて、自由自在に人々を救済する。これは回り道のように見えるけれども、これこそが、末^{すえ}とおりにたる大慈悲心だ、というふうに親鸞さんはおっしゃることがございます。聖道門の慈悲と浄土門の慈悲があるとすれば、どちらかという浄土門の慈悲のほうがいいんだよ、という話を親鸞さんはされるわけがあります。(同上)

親鸞という人物はその生涯を通じて、聖道門の慈悲と他力の慈悲、自力の慈悲と他力の慈悲の間で生涯を通じて揺れ動いた。揺れ続けた人物であると私は思います。私たちのこの世界に、もしも、本当の慈悲があるとすれば、それは自力の慈悲でもなければ、他力の慈悲でもない。二つの慈悲の狭間で、思い悩み苦しむこと。これが本当の慈悲の姿ではないかと思えます。(同上)

おすびーこんごう会にねがう

『教行信証』(親鸞聖人著書)最後の言葉

真言を採り集めて、往益を助修せしむ。何となれば、前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさんがためのゆえなり、と。

意訳: 真実の言葉を、集めて、往生(往益)のためのたすけ(助修)としたい。このことを、前に生まれた者は後を導き、そして後に生まれたものは前に生まれたものを訪ね、休むことなく、止まることない(連続無窮)ことを求めます。

もし菩薩、種種の行を修行するを見て、善・不善の心を起こすことありとも、菩薩みな摂取せん、と。

意訳: さまざまな行を修める菩薩を見て、善い心をおこしたり善くない心をおこしたりすることがあっても、菩薩はみな摂め取って救うであろう

顕浄土真実教行証文類(現代語版) 浄土真宗聖典 本願寺出版社

月刊同朋掲載

世界的ウイルス感染拡大と親鸞聖人

佐野明弘

親鸞聖人は幼少の頃から戦乱、飢餓、疫病によって多くの人々の死にゆく姿を見て来ましたが、ことにこの最晩年は天災、飢餓、疫病などが相次ぎ、民が疲弊していく様子がうかがえます。弘長二年（聖人90歳）にはついに幕府から封建制度の根幹をゆるがすような流民を許すという令（食べるものがある所へ移動してよいという令）が出たほどです。この状況で書かれた聖人88歳のお手紙があります。宛名は関東にいるお弟子さん、乗信房で、彼からのお手紙に対するお返事です。

「なによりも、ごぞことし、老少男女おおくのひとびとのしにあいて候うらんことこそ、あわれにそうらえ」（なんとと言っても、去年今年と老いも若きも男も女も多くの人々がともども死にゆくことこそ、悲しいことです）という書き出しです。長びく飢饉、疫病によって、去年から今年にかけ、今年といってもこのお手紙の日付は11月ですので、もう2年程も続く、余りに多くの人々の死にゆく様子と、そのことに驚く乗信房を気遣う聖人の思いがうかがえます。そこにあるのは、いのちのはかなさとどうにもならない宿業の身の現実に対する驚きです。

誰でも、死すべきものであることは知識としてはわかっているのですが、それが体得されることは難しく、死すべき身を生きていくことができず、ただ死を先延ばしにするばかりです。生を全うできないままむなしく死んでゆくのは嫌ですが、しかし、そんな思いごと死んでいかねばならない。人々のそんな姿を目の当たりにして、驚きうろたえている様子が乗信房のお手紙にはあったのでしょう。

聖人は「ただし、生死無常のことわり、くわしく如来のときおかせおわしましてそうろううえは、おどろきおぼしめすべからずそうろう」（ただし、すべてのものが移ろいへめぐり、生まれたものは必ず死すという道理は、お釈迦様が懇切丁寧にお説き下さってあることですから、驚くようなことではありません）とお説きになっています。

「驚き、うろたえることではない」といわれるこのお言葉は、昨今の世界的ウイルス感染拡大の状況下ではどの様に受け止められるでしょうか。感染者やその家族はもちろん、懸命に対応している方々、生活に困窮し不安に陥っている人々からすれば、或いはそうでない人にとっても、受け止めに困るといいますか、的外れな言葉として非難されそうです。しかし、いつの時代でも私たちは、詰まる所、この仏法の道理に帰すより他ありません。

生きている者にとって死は必然でありその縁は量り知れない。戦乱で死すもの、餓死するもの、伝染病、諸々の病で死すもの、水に溺れて死すもの、火に焼かれて死すもの、酒や薬に溺れて死すもの、毒にあたって死すもの、事故死するもの、他に殺されるもの、自ら死すもの、老衰で死すもの、その縁は量り知れないのです。これこそがまがいない現実なのです。私たちは死の縁の激しさにとらわれがちですが、死の因（死すべきものとして在ること）という激しくはないが深く大きな問いにも目が向けられなくてはならなかったのです。

強い感染力を持ち、死の危険を伴うウイルスの世界的感染拡大は私たちの生命や生活を脅かす厳しい問題であり、ウイルスの脅威を排除することは緊急の問題です。ただし、今、私たちが直面しているのはウイルスの脅威だけではなく、私たちが様々な縁によって必ず死に帰す身であるという現実

です。お手紙では、そのお言葉に続いて「まず」と前置きをした後、真宗の教えの中心をなすとも言える重要なお言葉が出てきます。

「まず、善信が身には臨終の善悪をばもうさず」（なによりも先立って申し上げておきたいことは、善信の身（思いでなく、思いを超えた在りようとしてのわが身）においては臨終のあり方に価値判断を加え、善いだの悪いだのと言うことはありません）

乗信房の問いは何であったのでしょうか。お手紙が残っていませんので推測するしかありませんが、やはり「臨終の善悪」という言葉で象徴されるような問題、しかも、長年念仏の教えをいただいているものの死に様気が気になったのではないのでしょうか。取り乱し、うろたえながら死んでいくものや、絶望の中に息絶える者もあつたでしょう。このような有様で亡くなっていくものは本当にはお念仏をいただいていたのか、信仰の明証についての問い。乗信房には念仏者としてあるべきよい死が予定されていたのかもしれませんが。

私たちは、あらゆることにおいて善し悪しに深くとらわれています。人生もよしと思えると生きる元気が出ますし、あしというときは生きることもつらいのです。これは人生や自分に対して一定の基準を設けて価値判断を下しているのです。この価値判断の眼が他者におけられたときにはあしという所に偏見や差別などの感情が生じてきます。ウイルス感染拡大に関しても偏見や差別によって誹謗中傷され苦しむ人も出ました。

よい死に関しては、ことに現代の医療の中で患者自らがよいと思える死を選び取る場面が実際に出現してきました。医師による幫助自殺などです。難病によって身体の自由が次第に奪われていく場合など、全く動けなくなる前に自ら死を選択する。簡単には言えませんが、全く動けない状態は不幸であり、生きるに値しないという社会通念化がいのちの選別を引き起こすことが危惧されます。（注1）こういった価値判断によるいのちの選別は生まれる前の子どもにも向けられているのが現状です。「あんなまで生きたくない」が共通の価値判断となると、その状況で生きようとする人々が社会から排除、抹殺の苦を受けることは避けられません。（注2）

「あんなふうになりたくない」「あんな死に方は嫌だ」とよい生、よい死を単純に求めてしまいがちですが、当然と思える単純さゆえに、又、よしと思えることの魅力ゆえに、善悪の価値判断がもたらすいのちの蹂躪は見えにくいものです。

本来、いのちは簡単に価値判断してはならない厳粛なものであり、生きるということは、そもそも意味があるとかないとかという価値判断を許さない、むしろ、意味や価値を超えた在りようをしているのではないのでしょうか。「臨終の善悪をもうさず」とは、そこそが私たちがともに帰すべきいのちの平等性の本質を表明するお言葉でありましょう。

（注1）生産性、機能性、経済性が重視される現代社会においては既にこういった価値観が通念化しており、それが、表面化したのが2016年7月に起きたやまゆり園事件です。既に植松被告の死刑が確定しており、事件は幕が引かれたかに見えますが、事件当時彼の意見に賛同する人が少なくなかったことは残されたままです。

（注2）『安楽死・尊厳死を語る前に知っておきたいこと』岩波ブックレット、集英社『すばる』2020年4月号掲載「死の自己決定」に潜む危うさ。いずれも安藤泰至氏著参照。